

聖書：マタイ 9：9～13

説教題：罪人を招くキリスト

日時：2019年1月27日（朝拝）

前回の9章1～8節では「罪を赦す権威」を持つキリストのことが記されました。それに続く今日の箇所では、その権威を持って「罪人を招くために来た」キリストのことが語られます。さっそく内容を見て行きますが、ここに出て来るのはマタイという人です。マルコやルカの福音書ではレビという名で出て来ます。聖書には二つの名前を持つ人が良く出て来ます（ペテロ・ケファ、サウロー・パウロ、バルナバー・ヨセフ、マルコ・ヨハネ等）。今日の箇所のマタイも同じです。彼は本名がレビで途中からマタイと呼ばれるようになったのか、あるいは最初からレビとマタイの両方の名を持っていたのか定かではありません。その彼について重要なことは、やがて12弟子の一人となる人物であること、そして何と云ってもこのマタイの福音書を書いた本人であることです。その彼はもともとは取税人でした。時はローマ帝国の時代。そのローマの支配の下で、マタイは税金を取っていた人でユダヤ人から嫌われていました。ユダヤ人としては異邦人の王に屈伏させられ、税金を取られること自体、屈辱的でしたが、このシステムに乗じて同胞からも税金を徴収するローマの手下になっているユダヤ人がいる。裏切り者、売国奴です。しかも取税人たちは集めたお金の一部を自分のポケットマネーとして私腹を肥やしていたようです。そこで10節に「取税人や罪人」という表現が出て来ます。取税人は罪人と同格、いやその最たる者と考えられていました。それで人々から嫌われ、蔑まれていました。また取税人の方は取税人の方で、自分たちは金持ちであるとのプライドを持って周りの人々を見下し、彼らの嫌悪感に対抗する心も持っていたと思います。

さてこの記事の驚きは、そんな取税人マタイにイエス様が「わたしについて来なさい」と声をかけられたことです。これは弟子への招きです。人間的に考えたら取税人はユダヤ人の教師が最も声をかけそうにない人です。彼はきよい宗教の世界、信仰の世界からは最も遠いところにいるような人です。しかしそんな彼にイエス様は「ついて来なさい」と言われました。ここに聖書の宗教、キリスト教は恵みの宗教であることが示されています。その人がどんな人間であるかによらず、ただ神の側からの一方的な恵みによる働きかけがなされた。マタイがこれを受けてすぐ立ち上がって従って行ったのも理解できます。もちろん彼がこれによって失うものもあります。マタイは取税人の仕事を失うこととなります。ここを離れたら、この席は他の誰かによってすぐ埋められてしまいます。

もう二度とここには戻れないでしょう。ペテロやヨハネらガリラヤ湖の漁師たちは、一旦網を捨て置いてイエス様に従っても、後でまたその場所に戻って漁師をすることは考えられます。しかしマタイはそういうわけには行きません。この場所を離れたら裕福な生活ができる保証はなくなります。しかし彼はイエス様に声をかけていただき、イエス様の弟子となって歩むことは、そんなものとは比較にならないはるかに素晴らしいことだと考えたのでしょう。迷いもなく、それらを後ろに捨てたのです。マタイはこれまでもイエス様についての話を色々聞いていたと思います。彼がいたカペナウムは9章1節でイエス様にとってのご自分の町と呼ばれた町であり、イエス様がガリラヤ宣教の拠点とされた町でした。マタイはそこで活動されたイエス様の言葉を直接聞く機会が何度となくあったかもしれません。しかし彼は、こんな取税人の自分には結局のところ関係のない世界だ、縁遠い世界だと思っていたに違いありません。ところがあのイエス様がこんな私のところに来て、私に向かって「わたしについて来なさい」と声をかけてくださった。その時、マタイはすべてのものを引き換えにしてでもこの方について行きたいと思ったのです。このような者に目を留めて神の国の祝福に生かしてくださるイエス様について行きたいし、これ以上の幸いはこの世界にはもうないと考えたのに違いありません。

さて10節以降は、ある家での食事会での出来事です。マタイはこれが誰の家かは書いていませんが、マルコの福音書とルカの福音書からマタイの家であったことが分かります。彼としては嬉しくて是非イエス様をお迎えしたいと、この会を開いたのでしょう。そして友だちを沢山連れて来ます。その人々とは取税人や罪人たちでした。罪人たちとは、ある事情があって律法を守れない人たち、あるいは守ろうとしていない人たち、また不道徳な人たち、その他、当時の社会的規範からはみ出して見下げられていた人たちです。マタイがこの人々を食事会に連れて来たことは、彼がイエス様というお方を正しく知ったことを示しています。普通、偉い先生をお招きする場合、私たちならどんな人を連れて来るでしょう。できるだけ身なりのきちんとした人、教養のある人、著名人、社会的地位のある人などではないでしょうか。ところがマタイは自分と同じ取税人また人々から見下されていた罪人たちを招きました。イエス様はこのような私たちを見捨てず、顧みてくださるお方。是非この方を知ってほしい。そう願ってこれらの人々を招待し、食卓を囲む楽しい交わりの時を持ったのです。ちなみに聖書において天国は祝宴のイメージで描かれています。8章11節：「あなたがたに言いますが、多くの人が東からも西からも来て、天の御国でアブラハム、イサク、ヤコブと一緒に食卓に着きます。」

ですからイエス様を中心としたこの食事の交わりは、やがての天国の前味となるもの、それを先取りするものだったと言えます。

しかしです。この光景を面白くないと思う人たちもいました。それはパリサイ人たちでした。彼らは弟子たちのところに来て言いました。「なぜあなたがたの先生は、取税人たちや罪人たちと一緒に食事をするのですか。」これは理由を聞きたいというより、非難するための言葉です。イスラエルの先生たる者は罪人たちとこのように交わるべきではない！と。ちなみにパリサイ人の「パリサイ」とは分離を意味する言葉です。彼らは汚れから自分たちを聖く守ることに一生懸命だった人たちでした。そんな彼らにとって、取税人や罪人たちと同じ食卓を囲むことは自分を汚すことである！宗教者としてはあり得ないことである！とても理解できないことである！そのように批判したわけです。

これに対してイエス様は三つのことを語られました。一つ目は12節です。「イエスはこれを聞いて言われた。『医者が必要とするのは、丈夫な人ではなく病人です。』」 医者は病気の人と関わると、その病気が自分に移るからと言って、病人から離れていては仕事はできません。病人のそばにいてこそ医者です。逆に丈夫な人、健康な人のそばにいる必要はありません。イエス様はこうして問題がある人、社会から見ておかしい状態にある人、霊的治療が必要な人たちとご自分が一緒にいることは正当なことであると仰いました。

二つ目は13節前半。「『わたしが喜びとするのは真実の愛。いけにえではない』とはどういう意味か、行って学びなさい。」これはホセア書6章6節からの引用です。これは当時のイスラエルがいけにえに代表される儀式律法を守ることには心配るものの、その内面のこと、すなわち真実の愛あるいはあわれみ（欄外注）という内実が欠けていることを責めた言葉です。これはもちろん神がいけにえを一切喜ばないという意味ではありません。いけにえなどの様々な儀式を定めたのは神です。これはあくまで比較をして、より大切な方を強調するための言い方です。中身がないただ形式を守るだけの宗教では神の前に意味がないということです。つまりここにいたパリサイ人たちも儀式的なことに思いを向けるばかりで、より大切な愛やあわれみを大事にしていなかった。取税人と関わると儀式的に汚れるということばかりを問題にして、もっと肝心なことをさっぱり考えていなかった。神は儀式そのものよりもあわれみの心を大切にすることを喜ば

れます。つまり取税人や罪人たちをあわれみ、彼らの癒しと救いのために関わるイエス様のあり方こそ、神の御心に合致するということです。真に大切なことを見失って、ただ形式的なことばかりに思いを向けているとしたら、それはホセアの時代の神に責められたイスラエルと同じだということです。

そして三つ目にイエス様はこう言われました。13 節後半：「わたしが来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招くためです。」 さて私たちはこのイエス様の言葉をどう聞くのでしょうか。このイエス様の言葉は何を言っているのでしょうか。イエス様が「正しい人ではなく」、罪人を招くために来たというのなら、正しい人にはイエス様は関係ないのでしょうか。イエス様を必要としているのは罪人たちだけなのでしょうか。ある意味ではそうです。正しい人はイエス様は要りません。しかし問題は、果たして私はどっちの人なのかということです。私は「正しい人」の側に入る人間なのか、それとも「罪人」の側に入る人間なのか。

ある人はこのイエス様の言葉を聞いて面白くないと感じます。自分が何かイエス様から退けられているように感じる。そしてイエス様が罪人の肩を持っているような気がして不満に思う。えこひいきしているように感じる。なぜそう思うのでしょうか。それはその人が自分を勝手に「正しい人」のグループに入れて考えているからです。ですから「わたしは正しい人を招くためではなく」という言葉を聞くと、直感的に私は退けられていると感じるのです。しかし自分は本当に正しい人なのかということを検討してみなければなりません。おそらくここにいたパリサイ人たちは自分たちを「正しい人」というグループに入れて考えていたと思います。正しい人とは我々を除いて一体誰のことだろうかと自負していたでしょう。しかし 13 節前半でイエス様が引用されたホセア書の言葉から分かりますように、実は彼らは神の御心から遠く離れていました。神は愛やあわれみを大事にしているのに、パリサイ人たちは儀式的なことばかりに関心を向けて、それを守っているから自分たちは正しいと考えていました。ここに神の判断と大きくずれのあることが示されています。彼らは自分たちは正しい人間であるとの自己義認の心を持っていましたが、それは全くピントのずれたものであり、神から見れば「正しい人」などでは全くなかった。また聖書は生まれながらの私たちについて「義人はいない、一人もいない」と言っています。とするならイエス様を必要としない「正しい人」は一人もいないことになります。ですからもし私たちが、13 節のイエス様の言葉を聞いて、自分が退けられていると思うなら、それは自分自身を誤って捉えているからです。自分を

「正しい人間」の方に勝手に入れて考えているからです。

しかしそんな私たちがもし自分を正しく捉えるなら、このイエス様のお言葉は大変なメッセージを私たちに語っているものとなります。イエス様はここで「わたしが来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招くためです。」と言われました。イエス様はそのために「来た」と言われました。どこからでしょう。それはこの世界の外から！です。これはイエス様が神なるお方であることを暗示する表現です。この世界を超えたところにおられる方が、ある目的を持って、この世にわざわざ来てくださった。何のためでしょう。それは罪人を招くため！とあります。こんな罪人のことを心にかけて、イエス様はこの世に来てくださった。どこへ招くため？それはご自分とともに歩む生活、ご自分の弟子となる生活、そしてご自分もたらす神の国の祝福・天の御国の祝福に生きる者となることへ、ということでしょう。イエス様はどうやってそのことを実現されるのでしょうか。それについてはこの福音書の中で今日の箇所以外に「わたしが来たのは～するためだ」と、ご自身がこの世に来た目的について語っている箇所を参照すると分かります。20章28節：「人の子が、仕えられるためではなく仕えるために、また多くの人のための贖いの代価として、自分のいのちを与えるために来たのと、同じようにしなさい。」ここにイエス様がこの世に来たのは、「贖いの代価として、自分のいのちを与えるために」であると言われています。これはイエス様の十字架上の身代わりの死を指しています。イエス様が罪人を救いの祝福に招くことができるのは、ご自分の尊い命を私たちの代わりに十字架上でささげてくださいるからです。その代償を支払って私たちを救いへと招き入れるためにイエス様は来てくださいました。その目的のもとにこの地上に来てくださり、みわざを成し遂げてくださいる。これは自分が罪人であることをわきまえ知る者たちにとって何という驚きのメッセージでしょうか。何ともったいないメッセージでしょうか。たとえ自分がどんなに罪深い者であっても、それはそれでいい。どんなにどうしようもない価値のない、周りから見下されている者であっても、それはそれでいい。イエス様はその「罪人を招くために」来た！と仰っています。このイエス様を信じ、イエス様の招きに応じるなら、私たちは罪を赦す権威を持ちたもうお方によってその罪を赦され、聖められ、この人生を造り変えられて、やがて天の御国に生きる者、またこの地上にある時からその祝福に生き始める者とさせていただくことができます。

このイエス様の言葉を今朝、私たちの心に深く響かせたいと思います。「わたしが来

たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招くためです。」 私たちが自分を正しく知り、自分が正しい者では決してなく、罪人のグループに入る者であることを知るなら、この言葉は私のための特別な言葉、かけがえのない言葉となります。イエス様はこの罪人を招くために、この私をめぐらして地上に来て下さった。そして私の救いのために、必要な値を十字架に至る苦しみと死を通して払ってくださった。そのイエス様の救いをマタイと同じように受け取って、イエス様の恵みにより、天の御国へと至る道を歩ませていただく者でありたいのです。